



日 時：令和 8 年 2 月 7 日（土） 14：00～17：00  
会 場：国民會館 武藤記念ホール（大阪府中央区大手前 2-1-2）  
定 員：70 人（申込先着順） 参加費：無 料  
主 催：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団／  
一般財団法人 金蘭会／大阪府立大手前高等学校同窓会 金蘭会  
お申し込み、詳細は ↓↓  
[http://www.iiclo.or.jp/07\\_com-con/01\\_grimm/index.html#20ceremony](http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/01_grimm/index.html#20ceremony)

■ ----- ■  
【 2 】 コ ラ ム  
■ ----- ■

\*\*\*\*\*  
《 1 》この本読んだ？ Yasuko's & Satoko's Talk  
\*\*\*\*\*  
『花に風』 吉野万理子/作 あわい/絵 理論社 2025年11月 対象年齢：小学  
校中学年以上

\* 今回のゲストは当財団特別専門員の小松聡子さん（S）です。

あらすじ：小学 4 年生で環境美化委員の夏帆（かほ）は、家にもらって帰った  
アジサイより学校の正面玄関のアジサイの方が長持ちしているのに気づき、  
その花をいけた同級生のお母さんで、小原流のお花の先生に同じ環境美化  
委員のショージとともに会いに行き、華道にはまってしまう。環境美化委員  
長の咲奈（さな）せんぱいも同じ教室で華道を習っているが、夏帆はなまい  
きだと目をつけられる。家でデザイン事務所を営んでいる夏帆の両親が  
大手企業社員の言いなりになっているのを見た夏帆は、自分もせんぱいか  
らの仕打ちをがまんしなければいけないと思う。

Y：タイトルは、「月に叢雲 花に風」ということわざの一部で、「いいことに  
ジャマが入ってしまう」、つまり、お花のレッスンは楽しいのに、せんぱい  
のいじわるで思いっきり楽しめないという夏帆の状況を現しています。ま  
た、この作品には華道が出てくるので、「花」にはその意味もあります。

S：物語に草花がいっぱいできて、「リアトリス」や「石化エニシダ」など  
知らない名前を見ると、インターネットで調べました。ねじ曲がっている  
石化エニシダは、夏帆が先輩との関係でもやややする場面で使われるなど、  
作品の内容とも関連しています。華道の豆知識もおもしろかったです。

Y：華道のおもしろさと同時に興味深いのが人間関係です。同じ環境美化委  
員の夏帆とショージの男女の友情はさっぱりしています。一方、夏帆を悩  
ませるのが、咲奈せんぱいです。

S：絵を描くのが好きで、人と違うことを大切にしている夏帆は、華道でも自  
分で工夫します。すると、咲奈せんぱいが来て、ルールに従うように言っ  
て、いきなり花をハサミで切って、角度もなおしてしまいます。先生のお手  
本を見に行かないで「わたしはわたし」でやってみる夏帆と、「お手本通り  
にやるのが上達への早道」と強くアドバイスする咲奈せんぱいの考え方は、  
華道だけでなく、いろいろなことに通じると思いました。

Y：もう一つ興味深いのが、夏帆の両親が仕事でパワハラを受ける一方で、夏  
帆の母がレストランでの対応をカスハラとSNSで流され、夏帆は、咲奈  
せんぱいの自分への態度はスクハラではないかと思うというように、「ハラ  
スメント」について語られている点です。

S：夏帆の母が、雨の中、お年寄りのお客さんを外で待たせ続けたことに対す  
る店員の態度の悪さに怒ったという点では、ハラスメントというには、不  
当のように感じましたが、ハラスメントは、こちらがどういうつもりだっ

たかということではなく、相手が「不当だ」と受け止めたらハラスメントになることが書かれている点はその通りだと思いました。

Y：そして、ハラスメントへの対応は、闘うだけでなく、距離を置くという方法もあることを夏帆の両親が自分たちの仕事を断ることで示したところは説得力があると思いました。

S：作品の最後で、夏帆が咲奈せんばいに思い切って話しかけると、せんばいが夏帆の作品をほめてくれます。作者は、それで二人が仲良くなりましたなどとまとめず、夏帆が「話せてよかった」と冷静に受け止めるところで終わらせています。それでより共感して読めました。

\*\*\*\*\*

## 《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

### 第124回「旅人のはなし」から

「すべて」と「はじまり」

宮沢賢治の8歳年下の弟清六は、父政次郎がしみじみと話していたということばを書き留めています（「兄賢治の生涯」1969年）。——「賢治には前生に永い間、諸国をたった一人で巡礼して歩いた宿習があつて、小さいときから大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ」政次郎は、若いころから仏典を好んで、各宗の碩学や名僧をまねいて仏教講習会を開いたりもしました。「宿習」は、辞書を引くと「宿執」の字で出てきますが、前世の因縁のことでしょう。

政次郎のことばを「旅人のはなし」から」に重ねるのは入沢康夫です。——「おそらく作者青春期のもっとも早い時期に書かれたこの散文には、（中略）父親の述懐を自ら立証するような「旅人」の喩（たとえ一筆者注）によって、あたかも自分の前生から後世までに対応するとき観照（本質を見つめること一筆者注）が提出されている。」（ちくま文庫『宮沢賢治全集8』1986年、解説）

〈ずっと前に、私はある旅人の話を読みました。書いた人も本の名前も忘れましたが、とにかく、その旅人は永い永い間、旅を続けていました。〉

これが書き出しです。「今思い出したくらい、その、はなしを書きます、」として書きつがれます。あるとき、旅人がひとりの道づれといっしょに歩いている場面からはじまって、「支那の南部の町」での話、「戦争と平和」という国へ遊びに行った話……。旅人は、あらゆる場所、あらゆる時間へ旅したと思われます。旅人は、行く先々で友だちができ、そして別れました。

〈旅人は旅の忙しさに大抵は忘れてしまいましたが時々朝の顔を洗うときや、ぬかるみから足を引き上げる時などに、この人たちを思い出して泪ぐみました、〉

あるときには、りっぱなお城に行きます。旅人は、この国の王子でした。それでも、王子は、また永い旅に出たのです。

おしまいには「盛岡高等農林学校に来ましたならば、まず標本室と農場実習とを觀せてから植物園で苺でも御馳走しようではありませんか。」と書かれています。この「旅人のはなし」から」は、賢治の高等農林時代の同人誌『アザリア』第1号（1917年7月）に発表されました。賢治の文学の出発点にあたる作品、賢治は20歳です。「自分の前生から後世まで」の「すべて」を書いた作

品が「はじまり」になったのです。(馬車別当)

(本文の引用は、『宮沢賢治コレクション3 よだかの星』によりました。)

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 78

\*\*\*\*\*

「わたし、あんまり大人を信用できなくなったわ。」

千世子は、罐詰事件のことを思い出しながらいった。

「千世ちゃん、ぼくたちは疎開していて、いろいろなことを学んだり、考えたりしたね。よろこびも、かなしみも、それがほかの人からのもらいものでなくて、自分自身の態度からわき出てくるものでなくては、ほんものじゃないと、ぼくは思うようになってきたんだ。自分が、よい態度をとったときによろこび、よくない態度をとったときになしむ……。そうするとね、自分がとても大きく思え、大切に感じるようになるんだ。」

孝は一語ごとに力をこめて千世子にいった。だが千世子には、井上先生のつめたい視線を前にしては、孝のような考え方になれなかった。

「そうね、だけどわたし、これだけは、がんとしてまもりつづけていこうと思うの、信用できない人の命令には、これからしたがわない。たとえ、先生にだって……。」

(『谷間の底から』柴田道子/作 岩波少年文庫 岩波書店 1976年7月 p.330 \*初版は1959年9月 東都書房)

12月14日(日)に講演と対談「日本児童文学戦後80年」(講師:藤田のぼる/宮川健郎)があり、対談の司会をする準備のために読みました。母親のおっぱいをさぐって寝ていたあまえん坊の小学5年生の千世子(ちせこ)が、静岡県の修善寺と富山県津沢での集団疎開を経験し、1年後の1945年11月に上野駅に戻って来るまでが描かれた作品です。

体が弱く、まじめな千世子が、同じ部屋の6年生の克枝にいじめられたり、孝という同学年の少年と友だちになったり、千世子が6年生になって、孝との友だち関係を若い先生から見とがめられたり、疎開先で家族が東京大空襲で亡くなったことを知ったり、引用にあるように、先生が罐詰を盗んで子どもに隠れて食べているのを目撃してしまったりします。多くのつらいことや理不尽なできごとには、千世子の深い悲しみや怒りは書かれていませんが、上野に向かう列車の車内で、千世子はこれまでの思いをまとめたように、孝に向かって「信用できない人の命令には、これからしたがわない。」という引用の言葉を言い、先生が非難すると、「わたしは自分で正しいと思うこと、自分の良心にだけ服従します。」と言います。

作者自身の体験を、客観性を保持しながら描いた文学作品として、今読んでも読み応えのある作品だと思いました。(Y)

\*\*\*\*\*

《4》行って来ました!

\*\*\*\*\*

美術館「えき」K Y O T Oで12月25日まで開催されている巡回展「レオ・レオーニと仲間たち」に行ってきました。日本では、教科書にも掲載されている絵本『スイミー』(谷川俊太郎/訳 好学社 1969年)や、絵本『あおくんときいろちゃん』(藤田圭雄/訳 至光社 1967年)などが人気のレオ・レオ

ーニ（1910-1999）ですが、本展示では、絵本原画のみでなく、絵画、彫刻、ポスター、新聞広告など、200点以上が展示されていました。

全体の構成は、第1章「アムステルダム シャガールのある家」、第2章「ジェノヴァとミラノの間で 未来派と広告メディアでの活動」、第3章「ニューヨーク アートディレクター時代」、第4章「イタリアでの制作」、第5章「レオの絵本」となっています。つまり、レオーニの生涯にそって作品が展示されており、絵本は49歳のデビューですので、第5章になっています。そして、5章の絵本原画はもちろんのこと、4章までがとても見ごたえがありました。

レオーニは、1910年、オランダで生まれ、イタリアとアメリカ合衆国を行き来して生涯を送ります。広告デザインやアートディレクターとして活躍し、製菓会社モッタの「モッタレツロ」というキャラクターを作りだし、雑誌『フォーチューン』や広告の仕事もします。洗練されたデザインや色の使い方には、絵本を彷彿とさせるものもありました。

また、ブルーノ・ムナリー、ソール・スタインバーグなど、芸術家たちとの交流の紹介も興味深く、ムナリーからレオーニへのクリスマスカードは芸術性にあふれ、画家でありイラストレーターであり、映画監督でもあったエマヌエーレ・ルツァーティ（1921-2007）のグリーティングカードは、しかけ絵本みたいだと思いました。

5章には、デビュー作の『あおくんときいろちゃん』から最後の絵本『びっくりたまご』（谷川俊太郎/訳 好学社1996年）まで、原画がない作品を含めてすべて詳しく紹介されていて、懐かしく思ったり、再読してみたくなったりしました。

展示には、80歳を過ぎても描いていた「黒いテーブル」の絵もありました。改めて絵本作家だけでない、レオ・レオーニの芸術活動の幅の広さと深さを感じることができた展示でした。（K）

美術館「えき」KYOTO <https://www.mistore.jp/store/kyoto/museum.html>

\*\*\*\*\*

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

\*\*\*\*\*

今月は休載します。

来月配信の次号（N0.185）からは、第6章「鳥越信先生」です。

<これまでの連載はこちらから>

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/watashinodeatta.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html)

\*\*\*\*\*

《6》 富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

\*\*\*\*\*

第2回「富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025」を開催中。

2つのキーワードを使った童話作品を募集します。400字詰め原稿用紙5～10枚で、未発表作品に限ります。

◎第2回のキーワード…「パン」「ワニ」

募集期間：11月20日（水）～2026年2月2日（日）

第1回同様、富安理事長がおもしろい作品5～6点を選び、2月20日（金）のメールマガジン（N0.186）で公開。読者にいちばんおもしろいと思った作品に投票していただき、1位と2位を決定します。

<詳細、応募方法はこちらをご覧ください>

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/storycompe.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html)

■ ----- ■  
【 3 】 全国のイベント紹介

● 古川タク 映像おもちゃ ふたたび展

会期：12月19日（金）～1月12日（月） ※休館日あり、要入館料

場所：おもちゃ映画ミュージアム（京都市上京区）

主催：（一社）京都映画芸術文化研究所 おもちゃ映画ミュージアム

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■  
【 4 】 プレゼント ☆

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『花に風』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、（1）お名前 （2）郵便番号・住所 （3）電話番号 （4）メールアドレス、よろしければ （5）このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は1月13日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—

今年もあとわずか。大掃除など、新年を迎える準備もしなくてはなりません  
が、つついとおっくうに。年末ぎりぎりまで動き回ることになりそうです。  
今年もたいへんお世話になり、ありがとうございました。来年もどうぞよろ  
しくお願い申し上げます。（T A）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお  
願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html)

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp